

茸の舞姫

泉鏡花

青空文庫

「奎^{もく}さん、これ、何^なに……？」

と小児^{こども}が訊^きくと、真赤^{まつか}な鼻^なの頭^{さき}を撫^なでて、

「綺麗な衣服^{べべ}だよ。」

これはまた余^なりに情^{なさけ}ない。町内^{ちやう}の奎^{もく}若^{わか}どのは、古^{ふる}筵^{むしろ}の両

端^はへ、笹^{ささ}の葉^はぐるみ青竹^{あおたけ}を立てて、繩^{なは}を渡^{わた}したのに、幾^{いく}つも蜘蛛^{くも}

の巢^ねを引^ひ擲^つませて、商^{あき}売^{ない}をはじめた。まじまじと控^{くわ}えた、が、

そうした鼻^なの頭^{さき}の赤^{あか}い^いのだからこそ可^よけれ、嘴^{くちばし}の黒^{くろ}い烏^うだと、そ

のままの流^{なが}灌^れ頂^{かんちやう}。で、お宗旨^{ちが}違^いの神社^{じんじや}の境内^{けいん}、額^{ぬく}の古^{ふる}びた

木の鳥居かたわらの傍なに、裕福な仕舞家しもたやの土蔵つちくらの羽目板うしろを背後うしろにして、秋の祭礼まつりに、日南ひなたに店を出している。

売るのであろう、商人あきんどと一所いしょに、のほんと構かまえて、晴れた空の、薄い雲うすいを見ているのだから。

餡あめは、今でも埋うずみ火びに鍋なべを掛かけて暖ぬめながら、餡あめ棒ぼうと云いう麻あ

殻さから殻がの軸じくに巻まいて売うる、賑にぎやかな祭礼まつりでも、寂さびたもので、お市おち、

豆まめ捻ねじ、薄はっかとう糖とうなぞは、お婆おばさんが白しろ髪がに手て拔ぬくを巻まいて商あう。

何でも買かいななの小父ちちさんは、紺くろの筒袖つづまを突張つっばらかして懐手むくねの黙もく

然んたるのみ。景気けいきの好いいのは、蜜みつ垂たらしじや蜜垂みつたらしじやと、菖蒲あやめ

団子だんごの附焼あおを、はたはたと煽あおいで呼よぶる。……毎年毎年顔かほも店みせも馴な

染じみの連中れんちゆう、場末ばつまつから出でる際商人きわあきんど。丹波鬼灯たんばほおずき、海酸漿うみほおずきは手ちゆう

ずばち
水鉢わきの傍、大きな百日紅さざるすべりの樹の下に風船屋などと、よき所に陣を敷いたが、鳥居外のは、気まぐれに山から出て来た、もの売で。
——

売るのは果もの類。桃は遅い。小さな梨、粒林檎つぶりんご、栗は生のまま……うでたのは、甘藷さつまいもとともに店が違ふ。……奥州辺とは事かわつて、加越かえつのあの辺に朱実あけびはほとんどない。ここに林のごとく売るものは、黒く紫な山葡萄やまぶどう、黄と青の山茱萸やまぐみを、蔓つるのまま、枝のまま、その甘渋くて、且つ酸すっぱき事、狸むが咽せて、兎が酔いそうな珍味である。

このおなじ店が、筵むしろ三枚、三軒ぶり。笠被かさきた女が二人並んで、片端ほおかぶに頬ほ被りかぶりした馬士まごのような親仁おやしが一人。で、一方の端はじの所

に、くだん件の空若が、繩に蜘蛛の巣を懸けてまかりいで罷出た。

「これ、何さあ。」

「美しい衣服べべじやが買わんかね。」と鼻をひこつかす。

幾歳いくつになる……空の年紀としが分らない。小児こどもの時から大人のよう

で、大人になつても小児ひとに齊しい。彼は、元來、この町に、立派

な玄関を磨いた醫師いしやのうちの、書生兼小使、と云うが、それほど

の用には立つまい、ただ大食いの食いそろう客。

世間体にも、容体にも、瘦やせても袴はかまとある処を、毎々薄汚れた

縞しまの前垂まえだれをめ《し》めていたのは食くい溢こぼしが激しいからで――

この頃は人も死に、邸やしきも他よそのものになつた。その醫師いしやというのは、

町内の小児こどもの記憶に、もう可なりの年輩だつたが、色の白い、指

の細く美しい人で、ひどく権高な、その癖婦おんなのように、口を利く
 のが優しかった。……細君は、赭あから顔、横ぶとりの肩の広い大おおま
るまげ めじり円鬚。眦あぶらが下つて、脂ほおぎつた頬へ、こう……いつでもばらばら
 とおくれ毛を下げていた。下婢おさんから成上つたとも言うし、妾めかけを直
 したのだとも云う。実まことの御新造は、人づきあいはもとよりの事、
かど門、背戸へ姿を見せず、座敷牢とまでもないが、奥まつた処こに籠
もりき切りの、長年の狂女であつた。——で、赤鼻は、章魚たことも河童かっぱ
 ともつかぬ御難ていなのだから、待あつかい遇も態なりふり度も、河原の砂から拾
 つて来たような体であつたが、実は前妻のその狂女がもうけた、
 実子で、しかも長男で、この生れたて変なのが、やや育つてから
 も変なため、それを気にして気が狂つた、御新造は、以前、国家

老の娘とか、それは美しい人であつたと言ふ……

ある秋の半ば、夕ゆうべより、大雷雨のあとが暴風雨あらしになつた、夜の

四つ時十時過ぎと思ふ頃、凄すさまじい電光の中を、蝸ひぐらしが鳴くような、

うらさみしい、冴さえた、透とおる、女の声で、キイキイと笑うのが、

あたかも樹の上、雲の中を伝うように大空に高く響いて、この町

を二三度、四五たび、風に吹廻ゆきされて往来とおいした事がある……通

魔まがすると恐れて、老若、呼吸いきをひそめたが、あとで聞くと、

その晩、齋木（医師の姓）の御新造が家うちを拔出し、町内を彷徨さまよつ

て、疲れ果てた身体からだを、社やしろの鳥居の柱に、黒髪を颯さつと乱きぬした衣は

鱗うろこの、膚はだえの雪の、電いなびかり光まつきに真蒼まつきなのが、滝をなす雨に打たれ

つつ、怪うおしき魚うおのように身震みぶるして跳ねたのを、追手おつてが見つけて、

医師いしやのその家へかつぎ込んだ。間もなくひつぎ柩ひつぎという四方張ぱりまないたのの俎のに載あせて焼かれてしまった。齋木の御新造は、人魚うしおになった、あの暴あ風雨らしは、北海の浜から、潮うしおが迎いに来たのだと言った——

その翌月、急病で齋木国手が亡くなった。あとは散ちりぢり々々である。代診を養子に取立ててあつたのが、成上りのその肥満女ふとつちよと、家い蔵えくらを売つて行方知れず、……下男下女、薬局ともがらの輩ともがらまで。勝手につか掘つかみ取りの、梟ふくろうに枯葉で散り散りばらばら。……薬臭い寂しい邸みづたは、冬の日売家の札はが貼はられた。寂しんとした暮方、……空地みづたの水みづた溜まりを町ようじんみずの用心水ようじんみずにしてある掃溜はきだめの芥棄場ごみすてばに、枯れた柳の夕霜ゆふしもに、赤い鼻を、薄ぼんやりと、提ちようちん灯ちようちんのごとくぶら下げて立たつていたのは、屋根から落ちたか、奎もくわか若わかどの。……親は子に、

空介とも空蔵とも名づけはしない。待て、御典医であつた、彼のお祖父じいさんが選んだので、本名は空之丞もくのじようだそうである。

——時に、木の鳥居へ引返そう。

二

ここに、空若がその怪しげなる蜘蛛くもの巣を拵げている、この鳥居の向うの隅、以前医師いしやの邸の裏門のあつた処に、むかし番太郎と言つて、町内の走り使人つかい、齋とき、非時の振廻りふれまわ、香奠かうでんがえしの配歩くぱりある行き、秋の夜番、冬は雪搔かきの手伝いなどした親仁おやしが住んだ……半ば立腐りの長屋建て、掘立小屋ほったてごやという体ていなのが棟ひとむねあ

る。

町中が、杳若をそこへ入れて、役に立つ立たないは話の外で、寄合持で、ざつと扶持ふちをしておくのであつた。

「杳さん、どこから仕入れて来たよ。」

「縁の下か、廂ひあわい合かな。」

その蜘蛛の巣を見て、通掛とおりがかりのものが、苦笑いしながら、

声を懸けると、……

「違います。」

と鼻ぐるみ頭を掉ふつて、

「さとからじゃ、ははん。」と、ぽんと鼻を鳴らすような咳せきばら

払いをする。此奴こいつが取澄こいつましていかにも高慢で、且つ翁おきな寂なびる。

争われぬのは、お祖父さんの御典医から、父典養に相伝して、脈を取つて、ト小指を刎はねた時の容体と少しも変らぬ。

杳若はが、さとと云うのは、山、村里のその里の意味でない。註をすれば里よりは山の義で、字に頭あらわせば故郷ふるさとになる……実家さとになる。

八九年前ぜん晩春の頃、同じこの境内で、小兒こどもが集あつて風たこを揚げて遊んでいた——杳若はは顛はちの大きい坊主頭で、誰よりも群を抜いてのほんと脊が高いのに、その揚げる風は糸を惜おしんで、一番低く、山の上、松の空、桐の梢こずえとある中に、わずかに百日紅さるすべりの枝とすれすれな所を舞つた。

大風来い、大風来い。

小風は、可厭、可厭……

幼い同士が威勢よく唄う中に、杳若はただ一人、寒そうな懐手、糸巻を懐ふところ中に差込んだまま、この唄にはむずむずと襟を摺すつて、頭かぶりを掉ふつて、そして面打つらつて舞う己おのが風かぜに、合点合点をして見せていた。

……にもかかわらず、鳥が騒おうまぐ逢魔まが時、颯さつと下した風も無いのに、杳若のその低い風が、懐の糸巻をくるりと空に巻くと、キリキリと糸を張つて、一ツ星に颯そと外れた。

「魔まが来たよう。」

「天狗てんぐが取つたあ。」

ワツと怯おびえて、小児こどもたちの逃散にげる中を、団栗どんぐりの転まがるように

杳若は黒くなって、風の影をどこまでも追掛けた、その時から、行方知れず。

五日目のおなじ晩方に、骨ばかりの風を提げて、やっぱり鳥居際にぼんやりと立っていた。天狗に攫さらわれたという事である。

それから時々、三日、五日、多い時は半月ぐらい、月に一度、あるいは三月に二度ほどずつ、人間界に居なくなるのが例年で、いつか、そのあわれな母のそうした時も、杳若は町には居なかったのであった。

「どこへ行つてござつたの。」

町の老人が問うのに答えて、

「実家さとへだよ。」

と、それ言うのである。この町からは、間に大川を一つ隔てた、山から山へ、峰続きを分入るに相違ない、魔の棲むのはそこだと言うから。

「お実家はどこじゃ。どういう人が居さつしやる。」

「実家の事かねえ、ははん。」

スポンと栓を抜く、件の咳を一つすると、これと同時に、鼻が尖り、眉が引釣り、額の皺が縊れるかと凹むや、眼が光る。……歯が鳴り、舌が滑に赤くなつて、滔々として弁舌鋭く、不思議に魔界の消息を洩す——これを聞いたものは、親たちも、祖父祖母も、その児、孫などには、決して話さなかつた。

幼いものが、生意気に直接に打撞る事がある。

「空やい、実家はどこだ。」

「実家の事かい、ははん。」

や、もうその咳で、小父さんのお医師さんの、膚触りの柔らかい、冷りとした手で、脈所をぎゆうと握られたほど、悚然とするのに、たちまち鼻が尖り、眉が逆立ち、額の皺が、ぴりぴりと蠢いて眼が血走る。……

聞くどころか、これに怯えて、ワツと遁げる。

「実家はな。」

と背後から、蔽われかかって、小児の目には小山のごとく追つて来る。

「御免なさい。」

「きやつ！」

その時に限つては、杵若の耳が且つ動くと言う——嘘を吐け。

三

海、また湖へ、信心の投網とあみを颯さつと打つて、水に光るもの、輝くものの、仏像、名剣を得たと言つても、売れない前さきには、その日一日の日当がどうなつた、米は両につき三升、というのだから、かくのごとき杵若が番太郎小屋にただぼうとして活いきているだけでは、世の中が納まらぬ。

入費は、町中持合いとした処で、半ば白痴はくちで——たといそれが、

実家さとと言う時、魔の魂が入替るとは言え——半ば狂人きちがいでもあるものを、肝心火の元の用心は何とする。……炭団たどん、埋火うずみび、楳ぼだ、柴しばを焚たいて煙は揚げずとも、大切な事である。

方便な事には、杓しやく若にわかは切き 凧たこの一件で、山やまに実家さとを持つて以来、いまだかつて火食をしない。多くは果物を餌えさとする。松葉を噛かめば、椎しいなんぞ葉までも頬張る。瓜うりの皮、西瓜すいかの種も差支えぬ。桃、栗、柿、大得意で、鳥や鳶とびは、むしやむしやと裂いて鱈なますだし、蝸まいまいつぶろ牛うし 虫むしやなめくじは刺身に扱あつかう。春は若草わかし、薺なずな、茅花つばな、つくつくしのお精進……蕪かぶを噛かじる。牛蒡ごぼう、人参は縦たてに啣くわえる。

この、秋はまたいつも、食通大得意、というものは、木の実時なり、実り頃、実家の土産みやげの雉きじ、山鳥やまがら、小雀こがら、山雀やまがら、四十雀しじゅうから、

色どりの色羽を、ばらばらと辻に撒き、廂に散らす。ただ、魚類に至つては、金魚も目高も決して食わぬ。

最も得意なのは、も一つ茸で、名も知らぬ、可恐しい、故郷の峰谷の、蓬々しい名の無い菌も、皮づつみの餡ころ餅ぼた

ぼたと覆すがごとく、袂に襟に溢れさして、山野の珍味に厭かせたまえる殿様が、これにばかりは、露のようなよだれを垂し、

「牛肉のひれや、人間の娘より、柔々として膏が滴る……甘味ぞのツ。」

は凄じい。

が、かく菌を嗜むせいだろうと人は言った、まだ杳若に不思議

なのは、日南では、影形が薄ぼやけて、陰では、汚れたどろどろ

の衣きものの縞目しまめも判明はつきりする。……委くわしく言えば、昼は影法師かげ法師に肖にて
 いて、夜は明あきらかなのであつた。
 さて、店を並べた、山菜やまぐみ蕨、山葡萄やまぶどうのごときは、この老鋪しにせに
 は余り資本かかが掛からな過ぎて、恐らくお錢あしになるまいと考えたらし
 い。で、精一杯せいに売うるものは。

「何なにだい、こりや！」

「美うつくしい衣服べべじゃがい。」

氏は呆あきれもしない顔かほして、これは買かいもせず、貰もらいもしない
 で、隣となりの木の実みに小遣こづかいを出だして、枝えだを蔓つるを提たげるのを、じろじ
 ろと流なが晒しめして、世よに伯樂はくらくなし矣い、とソレ青天井せいてんせいを向むいて、えへ
 らえへらと嘲笑あざわらう……

その笑が、日南ひなたに居て、蜘蛛の巣の影になるから、鳥が嘴くちばしを開けたか、猫が欠伸あくびをしたように、人間離れをして、笑の意味をなさないで、ぱくりとなる……

というもので、筵むしろを並べて、笠を被かぶつて坐つた、山茱萸、山葡萄の婦おんなどもが、件くだんのぼやけさ加減に何となく誘われて、この姿も、またどうやら太陽ひの色に朧おぼろおぼろ々として見える。

蒼あおい空、薄雲よ。

人の形が、そうした霧の裡なかに薄いと、可怪あやしや、掠かすれて、明あからさまには見えない筈はずの、扱しごいて搦からめた縄もつれ糸の、蜘蛛の囿いの幻影まぼろしが、幻影が。

真綿をスイと繰つたほどに判然と見えるのに、薄うす紅の蝶、浅あ

葱さぎの蝶、青白い蝶、黄色な蝶、金糸銀糸や消え際の草葉くさば螟蛉かげろう、

金亀虫こがねむし、蠅ひんむしの、蒼蠅、赤蠅。

羽ばかり秋の蝉ひぐらし、蝸きようの身の経帷子かたびら、いろいろの虫の死骸しがいな

がら巢ひんむしを引撈ひんむしつて来たらしい。それ等が艶つやつや々と色に出る。

あれ見よ、その蜘蛛の囿かまに、ちらちらと水銀の散った玉のよう
な露つゆがきらめく……

この空の晴れたのに。——

四

これには仔細しさいがある。

神の氏子のこの数々の町に、やがて、あやかしのあろうとてか
 — その年、秋のこの祭礼まつりに限って、見馴れないあきゆうど、商人が、妙な、
 異かわつたものを売った。

宮の入口に、新しい石の鳥居の前に立った、白い幟のぼりの下に店を
 出して、そこに鬻ひさぐは何等のものぞ。

河豚ふぐの皮の水鉄砲。

蘆あしの軸に、黒斑くろぶちの皮を小袋に巻いたのを、握って離すと、ス
 ポイト仕掛けで、衝つツと水が迸ほとぼしる。

鰻ふぐは多し、また壮さかんに膳ぜんに上す国で、魚市は言うにも及ばず、市
 内うち到る処の魚屋の店に、春となると、この怪あやしい魚うおを鬻ひさがない処は
 ない。

が、おかしな売方、一頭々々を、あの鰭ひれの黄ばんだ、黒斑なの
 を、ずぼんと裏返しに、どろりと脂ぎつて、ぬらぬらと白い腹を
 仰あおむ向けて並べて置く。

もしただ二つ並ぼうものなら、切落して生々しい女の乳房だ。

……しかも真まんなか中に、ズキリと庖丁目を入れた処が、パクリと赤
 黒い口を開あいて、西施せいしの腹の裂目を曝さらす……

中から、ずるずると引出した、長々とする百ひやくひろ腸ちようを、巻かし
 て、束つかねて、ぬるぬると重ねて、白腸しろわた、黄腸きわたと称となえて売る。……

……あまつさえ、目の赤い親仁おやしや、檻樓半纏ぼろぼんてんの漢等おのこら、俗に——云
 う腸わた拾わたいが、出刃庖丁を斜に構えて、この腸はらわたを切売する。

待て、我が食通のごときは、これに較ぶれば処女の膳であろう。

要するに、市、町の人は、こぞ挙つて、手足のない、女の白いどうな胴か中つつぎりを筒切にして食うらしい。

その皮の水鉄砲。小児こどもは争つて買競かいきそつて、手の腥なまぐさいのを厭いといなく、参詣さんけい群集ぐんしゅうの隙すきを見ては、シユツ。

「打上げ！」

「流星！」

と火花まねに擬て、縦横たてよこや十文字。

いや、隙くだんどころか、件あなどの空若あなどをば侮あなどつて、その蜘蛛の巣の店を打つた。

白玉の露はこれである。

その露ちりばの鏝ちりばむばかり、蜘蛛の囿こに色籠こめて、いで膚はださむ寒ゆうべき夕と

なんぬ。山から風す風一陣。

はや篝火の夜にこそ。

五

夜更け行く。この宮の境内に、階の方から、カタンカタン、三ツ
 四ツ七ツ足駄の齒の高響。

脊丈のほども惟わるる、あの百日紅の樹の枝に、真黒な立
 烏帽子、鈍色に黄を交えた練衣に、水色のさしぬきした神官
 の姿一体。社殿の雪洞も早や影の届かぬ、暗夜の中に顕れたの

が、やや屈かがみなりに腰ひねを捻ひねつて、その百日紅こすえの梢そでを覗のぞいた、霧たきおに朦朧もうろうと火かがりびが映なごりつて、ほんのりと薄紅うすくれないさの射たきおしたのは、そこに焚たきお落とした篝火かがりびの残余なごりである。

この明あかりで、白い襟あかり、烏帽子ひもの紐ひもの縹はないろ色はないろなのがほのかに見える。渋紙くろあばたした顔ちりに黒痘痕ちり、塵ちりを飛ばしたようとんで、尖とんがった目の光、髪かみはげ、眉まゆ薄うすく、頬骨ほおこの張かつた、その顔かお容かたを見みないでも、夜露よるばかり雨あめのないのに、その高足駄たかあしの音ねで分わる、本田せつり摺理せつりと申まをす、この宮みやの社司せつりで……草履くわか高足駄たかあしの他ほかは、下駄かを穿はかないお神かみぬ官し。

小児こどもが社殿せつりに遊あそぶ時とき、摺違すれちがつて通とつても、じろりと一ひと睨にらみみをくれるばかり。威たやすあつて容易たやすく口くちを利かかぬ。それを可恐こわくは思おもひ

わぬが、この社司の一子に、時丸と云うのがあつて、おなじ悪いたず戯らざかり 盛であるから、ある時、大勢が軍いくさごつこの、番に当つて、一子時丸が馬になつた、叱しっ！ 騎のつた奴やつがある。……で、廻廊を這はつた。

大喝一声、太鼓の皮の裂けた音して、

「無礼もの！」

社務所を虎のごとく猛然として顛あらかれたのは摂理の大人うしで。

「動！」と喚わめくと、一子時丸の襟首を、長袖のまま引ひ拵つかみ、壇さかしまを倒さに引落し、ずるずると広前を、石の大鉢もとの許つかに拵つかみ去つて、いきなり衣帯を剥はいで裸あたまにすると、天窓あたまから柄ひしやく杓やくで浴あたまびせた。

「塩あたまを持ひて、塩あたまを持ひて。」

塩どころじやない、百日紅の樹を前にした、社務所と別な住居すまいから、よちよち、臀いしきを横に振つて、肥ふとった色白な大円鬚おおまるまげが、夢中で駈かけて来て、一子の水垢離みずごりを留めようとして、身を楯たてに逸はやのを、仰あおむ向けに、ドンと蹴倒けたおいて、

「汚けがれものが、退しきりおれ。——塩を持って、塩を持てい。」
いや、小兒等こどもは一すくみ。

あの顔一目で縮み上る……

が、大人うしに道德というはそぐわぬ。博学深識じゆの従七位、花咲く霧に烏帽子は、大宮人の風情がある。

「火を、ようしめせよ、燠おきが散すまるぞよ。」

と烏帽子を下向けに、その住居すまいへ声を懸けて、樹の下を出しな

の時、

「雨はどうじや……ちと曇つたぞ。」と、密と、袖を捲きながら、紅白の旗のひらひらする、小松大松のあたりを見た。

「あの、大旗が濡れてはならぬが、降りもせまいかな。」

と半ば^{つぶや}呟き呟き、颯と卷袖の^{しやく}笏を上げつつ、とこう、石の鳥居

の^{かなた}彼方なる、高き帆柱のごとき^{はたざお}旗棹の空を仰ぎながら、カタリ

カタリと足駄を踏んで、斜めに木の鳥居に近づくと、や！ 鼻の

提^{ちようちん}灯、真赤な猿の面^{つら}、^{あめや}飴屋一軒、犬も居^おらぬに、^{あきら}杳若が明か

に店を張つて、暗がり、のほんとしている。

馬鹿が^{かしわで}拍手を^う拍つた。

「御前様。」

「柰か。」

「ひひひひひ。」

「何をしておる。」

「少しも売れませんわい。」

「馬鹿が。」

と夜陰に、一つ洞穴ほらを抜けるような乾からびた声の大音で、

「何を売るや。」

「美しい衣服べべだがのう。」

「何？」

暗やみを見透かすようにすると、ものの静かさ、松の香ぶんが芬ぶんとする。

六

鼠色の石持、黒い袴を穿いた宮奴が、百日紅の下に影のごとく踞うずくまつて、びしゃツびしゃツと、手桶ておけを片手に、箒ほうきで水を打つのが見える、と……そこへ——

あれあれ何じや、ばばばばば、と赤く、かなで書いた字が宙に出で、白い四角な燈あかりが通る、三箇の人影、六本の草鞋わらじの脚。ともしび

燈一つに附着くつつきあ合つて、スツと鳥居を潜くぐつて来たのは、三人ひと齊ひと

しく山伏なり。白衣びやくえに白布の顛はちまき巻したが、面おもてこそは異形いぎような

れ。丹塗にぬりの天狗に、緑青色ろくしやういろの般若はんんにやと、面白く鼻の黄なる狐

である。魔とも、妖怪変化とも、もしこれが通魔とおりまなら、あの火

をしめす宮奴が氣絶をしないで堪えるものか。で、般若は一挺の
 斧おのを提げ、天狗は注連結しめいたる半弓に矢を取添え、狐は腰に一
 口りの太刀を佩はく。

中に荒繩の太いので、笈おい摺ずりめかいて、灯ともした角行燈かくあんどんを荷になつ
 たのは天狗である。が、これは、勇しき男の獅子舞、媚なまめかしき女
 の祇園囃子ぎおんばやしなどに斉しく、特に夜よに入いって練歩ねりある行く、祭の催物の
 一つで、意味は分らぬ、(やしこばば)と称となる若連中のすすみ
 である。それ、腰にさげ、帯にさした、法螺ほらの貝と横笛に拍子を
 合せて、

やしこばば、うばば、

うば、うば、うばば。

火を一つ貸せや。

火はまだ打たぬ。

あれ、あの山に、火が一つ見えるぞ。

やしこばば、うばば。

うば、うば、うばば。

……と唄う、ただそれだけを繰返しながら、矢をはぎ、斧を舞
 わし、太刀をかざして、頤あごから頭なりに、首を一つぐるりと振つ
 て、交かわる交がわるに緩く舞う。舞果てると鼻の尖さきに指を立てて臨りん兵べい
 闘とう者しやう云々うんぬんと九字を切る。一体、悪魔を払う趣意だと云うが、
 どうやら夜陰のこの業ぎ体ようていは、魑魅魍魎ちみもうりようの類を、呼出し招き
 寄せるに髣髴ほうふつとして、実は、希有けぶに、怪しく不気味なものであ

る。

しかもちと来ようが遅い。渠等かれらやしろは社の抜裏の、くらがり坂とて、穴のような中を抜けてふとここへあらかわ蹶れたが、坂下に大川一つ、橋を向うへ越すと、山を屏風びょうぶに繞めぐらした、翠帳すいちようこうけい紅閨ちまたの衢ちまたがある。おなじ時に祭だから、宵から、その軒、格子先を練廻ねりまわつて、ここに時おくれたのであろう。が、あれ、どこともなく瀬の音して、雨雲の一際黒く、大なる蜘蛛おおいの浸にじんだような、峰の天狗松の常燈明の一つ灯びが、地獄の一つ星のごとく見ゆるにつけても、どうやら三体の通魔めく。

渠等は、すつと来て通り際しなに、従七位の神官の姿を見て、黙つて、言い合せたように、音の無い草鞋を留とめた。

この行燈で、単からに搦からんだいろいろの虫は、空蟬うつせみのその羅うすものの柳し条目まめに見えた。灯ひとりむしに蛾あざやかよりも鮮明である。

但し異形な山伏さつきの、天狗、般若、狐も見えた。が、一ひときわ際色は、
 杳若さつきの鼻の頭で、

「えら美しい衣服べべじやろがな。」

と蠹うごめかいて言った処は、青竹二本に渡したにつけても、魔道まどうに
 おける七たなばた夕たなばたの貸小袖たなばたという趣である。

従七位の摂理の太夫は、黒痘痕くろあばたの皺しわを歪ゆがめて、苦にがわらい笑わらいして、
 「白痴たわけが。今にはじめぬ事じゃが、まずこれが衣類ともせい……
 どこの棒杭ぼうくいがこれを着るよ。余りの事ゆえ尋ねるが、おのれと
 ても、氏子の一人じゃ、こう訊くのも、氏神様の、」

と巖おごそかに袖しやくに笏しやくを立てて、

「恐多いが、思おぼしめし召めいじやとそう思え。誰が、着るよ、この白痴たわけ、

蜘蛛の巣を。」

「綺麗なう、若い婦人おなごじやい。」

「何。」

「綺麗な若い婦人おなごは、お姫様じやろがい、そのお姫様が着さつしやるよ。」

「天井か、縁の下か、そんなものがどこに居る？」

と従七位はまた苦い顔。

空若は筵むしろの上から、古綿くわをくわへたような唇を仰向けあむむに反らして、
「あんな事を言つて、従七位様、天井や縁の下にお姫様が居るもの
のかよ。」

馬鹿にしないもんだ、と抵抗はむかいづら面は可よかつたが、

「解つた事を、草の中に居るでないかね……」

はたして、言う事がこれである。

「そうじやろう、草の中でのうて、そんなものが居るものか。あ
あ、何なんと云う、どんな虫じやい。」

「あれ、虫だとよう、従七位様、えらい博識ものしりな神主様がよ。お
姫様きのかは茸きのこだものをや。……虫だとよう、あはは、あはは。」と、

火食せぬ奴やつの齒の白さ、べろんと舌の赤い事。

「茸だと……これ、白痴たわけ。聞くものはないが、あまり不便ふびんじゃ。

氏神様のお尋ねだと思え。茸が婦人おんなか、おのれの目には。」

「紅べにたけ茸むしと言うだあね、薄紅うすあこうて、白うつくしうて、美しい綺麗おんなな婦人よ。

あれ、知らつしやんねえがな、この位な事をや。」

従七位は、白痴ばかの毒氣を避けるがごとく、笏しやくを廻して、二つ三

つ這奴しやつの鼻の尖さきを払いながら、

「ふん、で、そのおのれが婦人おんなは、蜘蛛の巣を被かぶつて草原に寝てお

るじゃな。」

「寝る時は裸体はだかだよ。」

「む、茸はな。」

「起きとつても裸体だにのう。——」

粧飾めかす時に、薄らうっすと裸体に巻く宝ものの美うつくしい衣服きものだよ。これは

……」

「うむ、天の恵めぐみは洪大じや。茸にもさして、被きるものをお授けなさ
るじやな。」

「違ちがうよ。——お姫様の、めしものを持って——侍女こしもとがそう言う
だよ。」

「何じや、待女こしもととは。」

「やっぱり、はあ、真白まっしろな膚はだに薄紅うすべにのさした紅茸だあね。お
なじものでも位が違ちがうだ。人間に、神主様も飴屋もあると同一おなじで
な。……従七位様は何も知らつしやらねえ。あはは、松蕈まつたけなん

ぞは正七位の御前様だ。錦の褥で、のほんとして、お姫様を視
 めておるだ。」

「黙れ！ 白痴……と、こんなものじゃ。」

と従七位は、山伏どもを、じろじろと横目に掛けつつ、過言を
 叱する威を示して、

「で、で、その衣服はどうじゃい。」

「ははん——姫様のおめしもの持て——侍女がそう言うのと、

黒い所へ、黄色と紅条の縞を持った女郎蜘蛛の肥えた奴が、両

手で、へい、この金銀珠玉だや、それを、その織込んだ、透通る

錦を捧げて、赤棟蛇と言うだね、燃える炎のような蛇の鱗へ、

馬乗りに乗って、谷底から駈けて来ると、蜘蛛も光れば蛇も光る

。」「

と物語る。君がいわゆる実家の話柄とて、喋舌る杳若の目が光る。と、黒痘痕の眼も輝き、天狗、般若、白狐の、六箇の眼玉も赫となる。

「まだ足りないで、燈を——燈を、と細い声して言う、土からも湧けば、大木の幹にも伝わる、土蜘蛛だ、朽木だ、山蛭だ、俺が実家は祭礼の蒼い万燈、紫色の揃いの提灯、さいかち茨の赤い山車だ。」

と言う……葉ながら散った、山葡萄と山菜萁の夜露が化けた風情にも、深山の状が思われる。

「いつでも俺は、気の向いた時、勝手にふらりと実家へ行くのだが、

今度は山から迎いが来たよ。祭礼まつりに就いてだ。この間、宵に大雨のドツとと降った夜さり、あの用心池の水みずたまり溜しやがの所を通ると、掃溜はきだめの前に、円い笠を着た黒いものが蹲踞しゃがんでいたがね、俺を見ると、ぬうと立って、すぽんすぽんと歩行あるき出して、雲の底に月のある、どしや降ふりの中なでな、時々、のほん、と立停たちどまっては俺が方をふり向いて見い見いするだ。頭からずぼりと黒い奴で、顔は分んねえだが、こつちを呼びそうにするから、その後へついて行くと、石の鳥居から曲ゆつて入って、こつちへ来ると見えなくなつた——

俺おらあ家へ入ろうと思うと、向うの百日紅さるすべりの樹の下に立っている……」

指した方を、従七位が見返った時、もうそこに、宮奴の影は
 なかつた。

御手洗の音も途絶えて、時雨のような川瀬が響く。……

八

「そのまんま消えたがのう。お社の柵の横手を、坂の方へ行つたらしいで、後へ、すたすた。坂の下口で気が附くと、驚かしやがらい、畜生めが。俺の袖の中から、皺びた、いぼいぼのある蒼い顔を出して笑つた。——山は御祭礼で、お迎いだ——とよう。……此奴はよ、大きい葦で、釣鐘葦と云うて、叩くとガーンと音

のする、劫羅経こうらた親仁おやじよ。……巫山戯ふざけた爺じいが、驚かしやがって、頭をコンとお見舞申そうと思つたりや、もう、すつこ抜けて、坂の中途かじの檜かの木の下に雨宿りと澄ましてけつかる。

川端へ着くと、薄らうつつと月が出たよ。大川はいつもより幅が広い、霧ぼうで茫ぼうとして海見たようだ。流ながれの上の真まんなか中へな、小船そうが一艘。

——先刻さつきここで木の実を売つておつた婦おんなのような、丸い笠かさきた、白い女おんなが二人乗つて、川下から流を逆に泳いで通る、漕こぐじやねえ。底蛇おと言うて、川に居る蛇が船に乗ツけて底を渡るだもの。船頭ふねなんか、要るものかい、ははん。」

と高慢な笑い方で、

「船からよ、白い手で招くだね。黒親仁は俺おぶを負おぶつて、ぎぶぎぶ

ながれと流を渡つて、船に乗つた。二人の婦人は、柴おんなに附着くつつけて売られたつけ、毒だ言うて川下へ流されたのが遁にげて来ただね。

ずっと川上へ行くゆくと、そこらは濁らぬ。山奥の方は明あかるい月だ。

真まつさお蒼はげしな激い流が、白く颯さつと分れると、大な蛇おおきが迎むかひに来た、で

ないと船が、もうその上は小蛇の力で動かんでな。底を背しよ負つて、

一廻りまわつて、船首みよしへ、鎌首もたを擡もたげて泳ぐ、竜頭の船と言うだ

とよ。俺は殿様だ。……

大おおいわ巖の岸へ着くと、その鎌首で、親仁の頭をドンと敲たたいて、

(お先へ。) だつてよ、べろりと赤い舌を出して笑つて谷へ隠れ

た。山路はぞろぞろと皆、お祭礼まつりの茸だね。坊主ぼんさま様も尼様も交つ

てよ、尼は大勢、びしよびしよびしよと湿つた所を、坊主

様は、すたすたすた乾いた土を行く。湿地茸、木茸、針

茸りたけ、革茸こうたけ、羊肚茸いぐち、白茸しろたけ、やあ、一杯だ一杯だ。」

と筵むしろの上を膝で刻んで、嬉しそうに、ニヤニヤして、

「初茸はつたけなんか、親孝行で、夜遊びはいたしません、指を啣くわえて

いるだよ。……さあ、お姫様の踊がはじまる。」

と、首を横に掉ふつて手を敲いて、

「お姫様も一人ではない。侍こしもと女は千人だ。女郎蜘蛛が蛇に乗っ

ちや、ぞろぞろぞろぞろみんな衣裳を持って来ると、すつと巻い

て、袖を開く。裾すそを浮かすと、紅玉ルビイに乳が透き、緑エメラルド玉ももに股が

映る、金剛石ダイヤモンドに肩が輝く。薄紅うすあかい影、青い隈取くまどり、水晶のよう

な可愛い目、珊瑚さんごの玉は唇よ。揃つて、すつ、はらりと、すつ、

袖をば、裳すそをば、碧あゐに靡なびかし、紫に颯さばと捌さく、薄うす紅べにをひるがえ翻かえす。

笛が聞える、鼓が鳴る。ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン、おひやら、ひゆうい、チテン、テン、ひやあらひやあら、トテン、

テン。」

くるわ

廓くるわのしらべか、松風か、ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン。

あらず、天狗の囃はやし子こであろう。柰若なわがの声こゑを遥はるかに呼交よこす。

「唄は、やしこばばの唄なんだよ、ひゆうらひゆうら、ツテン、
テン、

やしこばば、うばば、

うば、うば、うばば、

火を一つくれや……」

と、唄うに連れて、囃子に連れて、少しずつ手足の科しなした、三個のこの山伏が、腰を入れ、肩を撓ため、首を振って、踊出す。太刀、斧、弓矢に似もつかず、手足のこなしは、しなやかなものである。

従七位が、首を廻まわいて、笏しやくを振って、臀いしきを廻まわいた。

二本の幟のぼりはたはたと翻り、虚空を落す天狗風。

蜘蛛の囿きらくらの虫晃きらきら々と輝いて、鏘しょうぜん然、珠玉たまひびきの響あり。

「幾千金いくくらですか。」

般若の山伏がこう聞いた。その声の艶えんに媚なまめかしいのを、神官は怪あやしんだが、やがて三人とも仮装を脱いで、裸にして縷るな無なき雪はだの膚はだをあらわすのを見ると、いづれも、……血色うつくしき、肌理きめ細かな

る婦人である。おんな

「錢ぜにではないよ、みんな裸になれば一反やずつ遣る。」

価あたいを問われた時、杳若あたいが蜘蛛の巣を指して、そう言ったからであつた。

裸体に、被かいて、大旗の下を行く三人の姿は、神官の目に、実に、紅玉ルビイ、碧玉サファイヤ、金剛石ダイヤモンド、真珠、珊瑚を星のごとく鑲ちりばめた羅綾らりようのごとく見えたのである。

神官は高足駄で、よろよろとなつて、鳥居を入ると、住居すまいへ行かず、階きざを上つて拝殿に入った。が、額の下の高麗こうらいべりの畳の隅に、人形のようになつて坐睡いねむりをしていた、十四になる緋ひの袴はかまの巫女みこを、いきなり、引立てて、袴を脱がせ、衣きぬを剥はいだ。……

この巫女は、当年初に仕えたので、こうされるのが掟だと思つて自由になつたそうである。

宮奴が仰天した、馬顔の、瘦せた、貧相な中年もので、かねどもりて訥であつた。

「従、従、従、従、従七位、七位様、何、何、何、何、何事！」
 笏で、ぴしやりと胸を打つて、

「退りおろうぞ。」

で、虫の死んだ蜘蛛の巣を、巫女の頭に翳したのである。

かつて、山神の社に奉行した時、丑の時参詣を谷へ蹴込んだり、と告つた、大権威の摂理太夫は、これから発狂した。

——既に、廓の芸妓三人が、あるまじき、その夜、その怪しき

仮装をして内証で練った、というのが、尋常ただごとではない。

十日を措おかず、町内の娘が一人、白昼、素裸になつて格子から抜けて出た。門かどから手招きする空若の、あの、宝玉の錦が欲しいのであつた。余りの事に、これは親さえ組留められず、あれあれと追う間まに、番太郎へ飛込んだ。

市の町々から、やがて、木蓮もくれんが散るように、幾いくたり人となく女が舞込む。

——夜、その小屋を見ると、おなじような姿が、白い陽かげろう炎の
ごとく、空若の鼻を取巻いているのであつた。

大正七（一九一八）年四月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年1月24日発行

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

茸の舞姫

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>